

平成24年度「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」実績報告書

1. 事業名称

テキスタイルおよびクリエイティブ分野におけるグローバルな人材育成プロジェクト

2. 事業実施期間

委託を受けた日(平成24年7月31日)～平成25年3月15日

3. 産学官連携コンソーシアム又は職域プロジェクトの別

職域プロジェクト

産学官連携コンソーシアム又は職域プロジェクトの名称

グローバルファッションクリエイター人材養成産学コンソーシアム

関係するコンソーシアムの名称(職域プロジェクトのみ記入)

クリエイティブ分野における専門人材養成産学コンソーシアム

4. 分野名

④クリエイティブ(コンテンツ、デザイン・ファッション等)

「その他」分野名

5. 代表機関

■ 代表法人

| | |
|------|-----------------------------|
| 法人名 | 学校法人 中西学園 |
| 理事長名 | 中西 克彦 |
| 学校名 | 名古屋学芸大学 |
| 所在地 | 〒470-0196 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57 |

■ 事業責任者

省略

■ 事務担当者(文部科学省との連絡担当者)

省略

6. 産学官連携コンソーシアム又は職域プロジェクトの構成員・構成機関等

(1) 構成機関

| | 構成機関(学校・団体・機関等)の名称 | 役割等 | 都道府県名 |
|----|-------------------------|-----|-------|
| 1 | 名古屋学芸大学大学院 | 総括 | 愛知県 |
| 2 | 文化ファッション大学院大学 | 委員 | 東京都 |
| 3 | 杉野服飾大学 | 委員 | 東京都 |
| 4 | 名古屋学芸大学 | 委員 | 愛知県 |
| 5 | 名古屋ファッション専門学校 | 委員 | 愛知県 |
| 6 | 有限会社 テ・アシュ・デ ラ メゾン | 委員 | 東京都 |
| 7 | (財)一宮地場産業ファッションデザインセンター | 委員 | 愛知県 |
| 8 | 森技術士事務所 | 委員 | 愛知県 |
| 9 | ナゴヤファッション協会 | 委員 | 愛知県 |
| 10 | | | |

(2) 協力者等

| 氏名 | 所属・職名 | 役割等 | 都道府県名 |
|--------|------------------------------|----------------|-------|
| 安藤 文子 | 名古屋学芸大学 メディア造形研究科 教授 | 代表(総括) 作品制作指導 | 愛知県 |
| 馬場園 晶司 | 文化ファッション大学院大学 助教 | 大学院教育 作品制作指導 | 東京都 |
| 安部 智子 | 杉野服飾大学 准教授 | 大学学部教育 作品制作指導 | 東京都 |
| 内田 和邦 | 名古屋学芸大学 メディア造形学部 教授 | ファッションショー企画・演出 | 愛知県 |
| 井後 治子 | 名古屋ファッション専門学校 校長 | 専門教育 作品制作指導 | 愛知県 |
| 柴田 正康 | (財)一宮地場産業ファッションデザインセンター 事務局長 | 展示企画指導 | 愛知県 |
| 畠山 巧 | 有限会社 テ・アシュ・デ ラ メゾン 代表 | デザインアドバイザー | 東京都 |
| 森 益一 | 森技術士事務所 所長 | テキスタイル企画アドバイザー | 愛知県 |
| 中島 幸介 | 中伝毛織株式会社 代表取締役社長 | テキスタイル製作アドバイザー | 愛知県 |
| 馬場 巖 | ナゴヤファッション協会 事務局長 | プレゼン指導 アドバイザー | 愛知県 |

(2) 事業の内容について（産学官連携コンソーシアム又は職域プロジェクトにおける具体的な取組内容）

かつて、日本経済の牽引力であったファッション業界は、世界経済の中心となりつつある中国、急成長する東南アジア等の追い上げにより、大きな曲がり角に立っている。その状況下にあっても、日本製のデザイン性、品質性等は今なお、世界でもトップレベルであり、「made in Japan」の強みを維持してきた。我が国における同分野の再構築を促すには、その特性を生かして時代が求める新製品の開発を促進することにより、改めて成長分野として期待できるものと考えられる。そのためには、これまで以上にグローバルな視点に立ちファッション分野で活躍できる総合力を持った人材を養成することが急務である。

この事業では、ファッション分野における国際社会に対応した人材養成を目的に、平成23年度においては具体的な具体策を検討し、取り分け、尾州産地に着目して、視察、分析を行い、具体的なプログラムを構想した。業界専門家、工場経営者、現場で働く人々へのインタビューや協議等の結果、日本の産業特色を生かすためには、素材の重要性に立ち返り、一層の理解を深めることが、今後の日本におけるクリエイション力の強化につながるという結論に達した。

平成24年度は、この結果を実践に移すため、次のような取り組みを計画し実行した。

ファッションの世界は幅広いが、なかでもクリエイションに関する分野において活躍できる人材を育成することは不可欠と考え、関係諸団体、企業、大学、専門学校を始め、可能であれば、より若い世代からの養成を意図して家政系の高等学校とも連携を図り、即戦力となる専門的職業人を育てるシステムおよびルートの開発を試みた。

他方、ファッション製品に高付加価値を付与するためには、新しいテキスタイルの開発が重要であるが、現状では学生、指導者ともにその知識・技術の習得の場を殆ど持っていない。そこで適切なモデルケースと成り得ると着目した尾州地区のウール素材をテーマとし、テキスタイルメーカーと将来のクリエイターとなる学生が、コラボレーションをしながら国際競争力のあるウールテキスタイルを研究し、将来、一流と称されるクリエイターを養成するルートの確立をめざし、産地研修・素材の共同開発を実践した。

具体的な内容としては、各教育機関で力のある学生を選び、数年経てばその技術が途絶えたとされるような貴重な技術を持った職人の指導を受け、現場での研修実施し、テキスタイル開発の現状を見学した。また、職人との意見交換などを行い、素材開発に対する貴重な技術伝達と技術指導を体験できた。その後、開発した素材を使用し、学生各自がデザインした作品を制作した。ウール素材を加工・縫製して20着の作品制作をした。その成果を、ウール産地の一宮にて開催された素材展「THE 尾州」にて展示とファッションショーを開催し発表した。今後、海外の素材展において企業のブースで展示することも予定している。

その他、各教育機関においても展示を行い、国内で開催される大きな素材展でも、今回の活動を積極的にアピールし、クリエイターの卵達に刺激を与える機会も設けていきたい。

更にそれぞれの場で学生は、プロの方々、業界人からの第三者評価を受け、次への創作意欲に繋がっていく。それらの地道な努力の積み重ねで、技術はありながら、海外に比べてテキスタイルデザイン力が欠けているとされる、日本のテキスタイルを前進させることができる。テキスタイルがよければさらにレベルの高いデザインが考えられる。

日本においては、それぞれの地場産業で計り知れない技術を有しているのに、衰退しきらない間に、これらテキスタイルメーカーとともに新しい素材を開発し、国内の主たる素材見本市で、今後も開発したテキスタイルを用いてデザイン・製作し、完成品を継続的に発表していくことで、日本の若い力を海外にアピールしていくことに繋がっていくと考えている。

現在、パリのACADEMIE INTERNATIONALE DE COUP DE PARISでの展示を計画している。

この教育機関は、フランスで唯一の政府公認専門学校で、有名ブランドではそれぞれ80%以上が卒業生であり、各ブランドで活躍していることから、集客力もあるため依頼した。

その他、海外素材展での展示やドイツ国立ブフォルトツハイム大学での展示も模索していく。可能であれば、将来は海外においてもファッションショー形式で発表したい。

この事業を期に、産業界とのパイプが太くなることにより、事業終了後も連携し、教育、産業の両面で活力を与えることを期待している。

(3)事業実績について（連携体制、工程、普及方策、計画時に設定した活動指標(アウトブット)・成果実績(アウトカム)の評価等)

1)連携体制

この事業では、立場の異なる学校が、同じ目標を持って取り組む点に大きな意義があった。委員・協力者として素材開発を積極的に行っている企業・技術者を加え、スタートからプロに学ぶ体制を整えた。次いで、企画に対する考え方を指導しながら、素材生産工場の代表者から工場生産に対する考え方を学んだ。ここでは、指導に当たる教員も参加し、素材生産の現状を学生とともに学んだ。最終作品に関しては、地元の公的機関の素材展でも紹介しプロの評価を受けた。また今後は、海外にも目を向けながら、産・学・官が一体となって連携できる体制を進めたい。

2)工程

次のような工程で、精力的に取り組み、多くの業界人や学生に結果を公表した。

①委員会 2012年 9月、10月 2013年 1月、2月(2回) 計5回実施
その他、東京地区の展示会議や、一宮展示・ファッションショー会議を行った。

②実施行程

- ・普及のための素材セミナー（場所：東京会場・名古屋会場）
- ・テキスタイル開発についての検討会(素材デザイン)
- ・産地における研修(見学と開発打ち合わせ)
- ・製品のデザイン
- ・作品制作
- ・展示、ショーによる発表

3)普及方策

・関係機関に今回の目的を盛り込んだ案内を1,770通発送

| | |
|--------------|------|
| 繊維染色資材メーカー | 195通 |
| アパレル業界 | 425通 |
| 副資材メーカー | 174通 |
| 行政・関連団体・組合 | 82通 |
| デパート・専門店 | 274通 |
| 大学・専門学校・高等学校 | 433通 |
| その他 | 187通 |

- ・結果は、報告書ならびに作品DVDを関係者に配布、発送する
- ・地域の団体行事においてその成果を展示・ショーで一人でも多くの業界人クリエイターにアピール
- ・参加各教育機関における展示
- ・学会における事例発表(ポスター発表・報文)

4)アウトブット・アウトカム

◎期待される活動指標

- ・学校間の強い連携
 - ・業界と学校のパイプ
 - ・海外に視点を置いた物づくり強化
- 産地見学・セミナーに参加した者は、その内容を理解することにより、その後の活動に幅が広がり、担当した本人以外の周辺学生にも影響を与えることができた。
- また、布の誕生からかわるによりものづくりへの意欲がさらに大きくなり、これらの研修から得た豊富な知識を駆使して作品を作り上げる学生の未来に対する夢は考えられないほどふくらんだと思われる。
- 教員も今回の体験を企業や学会・学会発表・セミナーでの講演・研究会で広く紹介し、指導者達に技術伝承の必要性をアピールしていくため、現在6月の学会発表の準備を行っている。

◎成果の実績(アウトカム)

今回、選んだテーマとなるウール素材は、イタリアと並んで日本は織物生産、染色加工技術で高い実力をもっている分野である。

若い人に力を結集させこのプロジェクトを機会にやる気を育て、技術を伝承するクリエイターの育成と地場産業の技術を後々まで伝えるためのプログラムをスタートできた。

また、世界に誇れる製品を作り出すことができれば必ず注目され、企業の動きが一段と活発となるものと期待している。

(4) 事業終了後の方針について(継続性、発展性 等)

本事業のファッション人材のためのプログラムづくりの成果を、展示会やショーの案内、報告書の発送などにより、関連団体・教育機関・業界に十分周知徹底する。素材づくりから行うことは時間もかかり、それぞれの通常カリキュラムと同時進行で作品の完成、発表までこぎつけるにはかなりの努力が必要になる。

しかし、今回の教育機関の5教育機関は幸いにも日本国内の大規模なコンテストで多くの学生が入賞を果たし、上位を獲得するなど国内ではリーダー的存在であることから、他の教育機関への影響もかなり大きいと考えられる。実際に昨年度のプログラムに参加したそれぞれの教育機関が、視察した工場とコンタクトを取り、今年度9月に、東京、名古屋から多くの学生が工場見学を予定するなど、早速、現場の教育に取り入れている。これらの企業の見学は不可能であったが、文部科学省が新しい試みをしていただいていることを知った企業が前向きに見学を許可されたのは大きな成果であり、よい結果を得ることができた。この試みは、今後も企業と連携しながら、確立していきたい。

また、この例からも、事業は、1年、2年の単位ではなく長い時間をかけて教育機関と産業界が密着な関係を持ちながら、継続していくことが大切と考える。

今後は、この事業を機会に地場産業活性化とファッション産業の再生、国内生産の増強のスタートにし、この事業を短期間で終了しては、発展はないので少しずつでも継続していきたい。

今回制作した作品は、今後開催される大きな素材展示会での発表やショーでの発表はもちろんであるが、高等学校などでの展示の機会をつくり、その作品を見学させ、事業の趣旨をさらに若い世代にも徹底することも必要と考えている。

まず、今年度はウールを主たる素材として取り上げたが、次年度からは、関東地区の地場産業や伝統産業、次いで浜松の綿素材、北陸の合繊織物などへと幅を広げながら継続的に展開し、さらに大きく発展させたい。

既に、今回の発表をきっかけに、福井の合繊織物企業3社とのコラボレーション企画も進んでいる。

最後に、現場の教育システムへの落とし込みについては、次の事項を実現する予定である。

昨年の事前調査に加え、この申請書類作成前に今年度も種々問い合わせを行った結果、素材メーカーも若い学生たちの考えを強く求めていることが判明している。そこで、学生を指導している教員へのアピールとして、繊維関連学会において、今回の事例を発表し、関心を喚起する。

ここでは、基礎教育と技術伝承の重要性を具体例で紹介し、学生指導に当たる素材担当教員、被服造形教員の認識を変える努力を続けたい。

さらに、今年度の事業終了後も、他の大学や専門学校に働きかけて輪を広げ、毎年2月に開催されるウール素材展で展示を行う予定である。